

西鶴作品教材化の背景と「古典教育」観

——藤村作の中学国語教科書編集と近世作品教材の例より——

大久保 順 子

井原西鶴作品、殊に「世界の借家大将」や「大晦日はあはぬ算用」等の作品が国語教科書の教材となった経緯については、作品の性格・文体・作家に関する文学観の変遷、また戦前から戦後及び平成の今日に至る様々な論争の背景から眺めることができる。西鶴作品を「古典教材とすることの可否」、あるいは「文体の難しさ」等の特質を踏まえて教材としていかに指導するか、等の様々な問題は、『源氏物語』教材化問題^{〔1〕}の例のように、戦前から多く指摘されてきているのである。本稿では、戦前の国語教科書編集等で活躍した藤村作の国語教育観と西鶴を含む国語教材の例を中心に、学習教材となった近世文学作品や西鶴作品に何が求められてきたのかについて、文学研究観と国語教育観の両面から考察を行いたい。

一、西鶴作品の古典教材化の前景

戦前の教科書における西鶴作品の採用状況に関する有働裕や堀切実の調査^{〔2〕}によると、最も初期の『国文読本』（自

西鶴作品教材化の背景と「古典教育」観

治館、明44) 卷十「世界の借家大将」(『日本永代蔵』)をはじめとして、以下昭和十八年までの教材化の中で、既に「教科書に比較的によく採られる」章話の傾向が表れている。『改訂中等新国文』(藤村作・島津久基 至文堂、昭和9) 卷九等にもみられ最も採用例の多い「世界の借家大将」や、『国文』(岩波書店、昭和12)等の「大晦日はあはぬ算用」(『西鶴諸国ばなし』) 以外では、例えば『帝国新国文』(藤村作、帝国書院 昭和8) 卷十「安立町の隠れ家」(『万の文反古』)、『新中学国文』(鈴木敏也 目黒書店 昭和14) 卷十「蚤の籠ぬけ」(『西鶴諸国ばなし』)等の作品もみられる。また、西鶴作品教材の採用される旧制中学や高等女学校の国語教科書の編集に、鈴木敏也・藤村作・頼原退蔵・能勢朝次・藤井乙男といった当時の近世文学研究者が多く関わっている点も注目される。

昭和初年代の中でも昭和六年は、ある「記念すべき年」であった。

本年は西鶴が好色一代男をだして、浮世草子といふ新小説を創めた天和二年から二百五十年に当たるといふ訳で、東京では小説家の歴々が西鶴全集の現代語訳をだし、大阪では西鶴展覧会が朝日新聞の後援で三越に開かれ、エロ物流行の際として、明治二十五年頃紅葉露伴等によつて西鶴が復活して以後、再び世間の注意をひく事になつた。(藤井紫影「西鶴の好色本と遊女評判記」)

この「展覧会」については『西鶴記念展覧会目録』(昭和六年六月十五日より同月廿一日まで、会場 東京・日本橋三越⁴⁾)が残されている。頼原退蔵は昭和六年五月の『大阪朝日新聞』の「西鶴の大衆化」⁵⁾と題した文章に

凡そ今日中等程度の国文教科書で「永代蔵」か「胸算用」の一篇くらゐをその中に加へてゐないものは殆どないであろう。それほど西鶴の名は国民的になつてゐる。(※引用箇所傍線は引用者による。以下も同)

と記した。藤井の指摘する「明治二十五年頃」の「紅葉露伴等」による所謂「西鶴文学復活」とは、好色本を「俳諧の意を含みたる勸善懲悪の物語」と謳いつつ所収した帝国文庫『西鶴全集 上巻』刊行の頃である。その帝国文庫本の発禁事件(明治二十七年七月五日)に対し、水谷不倒や島村抱月は『早稲田文学』に批判を寄せ、⁶⁾当時の新聞にも「元禄文学其物は明治政府の為に明治社会との交通を遮断せられたりといふも殆ど大過なきなり、これ文学社会に取りて兎も角も一大問題にあらずや」「余輩は必しも元禄文学に心酔する者にあらず(中略)と雖も(中略)文

学の独立の爲め出版の自由の爲に頗る慨嘆せざるを得ざるなり」(G. R. 生「西鶴全集の発売禁止」、『讀賣新聞』明治二十七年七月九日)といった記事が寄せられたりした。

自然主義作家による西鶴の「文学的」評価が進むにつれての、「文壇を中心とした西鶴ブームとでも言うべき西鶴熱の高まり」⁽⁸⁾は、未だ「元祿文学」の市民権乏しき感ありのこうした時期を経て後のことになる。明治末〜大正時代に訪れた一連の「文学教育」の趨勢における古典〜近代の様々な「文学作品の教材化」の中で、西鶴の作家性や作品に対して自然主義リアリズム作家論的な要素が当時の研究者らに評価され、教育・文化・研究の各分野における「西鶴」という「文学」の扱いが拡がっていく。昭和初期の全集出版ブームと『有朋堂文庫』『日本古典全集』等のシリーズでの西鶴作品テキスト化にみられる、出版文化面から見た「古典作品本文の一般的普及」の趨勢⁽⁹⁾も、その背景と考えられる。もちろん出版規制上、『二代女』『五人女』等の描写場面の本文の「伏字」の処理も少なくとも、活字翻刻で全文を読むことの困難さはあるものの、明治二十年代の帝国文庫や紅葉露伴の頃とは時代を画した西鶴作品(及び古典作品)本文の「大衆化」が、昭和六年頃には進んでいた。戦前の西鶴作品の教材採用の前景として、まずそうした作品受容の状況を踏まえておく。

二 国語教科書の背景としての「教材観」の議論

大正期〜昭和初期は、片上伸『文芸教育論』等の風潮を受けて国語教科書での「文芸作品の教材化」が進み、またその是非についての各界の議論が盛んな頃でもあった。片上の「人間の道德生活に対して最も微妙な、甚深な、根本的永久的な感化を有するものは文芸であつて、その力に依つて、教育の根本的総合的な事業が成遂げられなければならぬ」(『八大教育主義』、大10)⁽¹⁰⁾といった主張に基づく「文学尊重」が謳われた時期である。片上の主張は、当時隆盛したオイケンの「人格主義」的唯心論とベルグソン哲学の影響を受けて、明治期の坪内逍遙『文芸と教育』の「読書の教育的功罪」の目録化自体を否定し、児童の「人格」「生命」の創造につながる「総合的」な「文

芸」の世界の読書行為を称揚するものであり、その言説には「文学者を人格で評価する視点と教師の人格を重視する視点が同時発生的に出現している」^[1] 特色があることが今日も評価されている。

当時の保科孝一ら国語研究会編の雑誌『国語教育』には、大正期の国語「教材観」議論の諸相が窺える。『国語教育』第7巻第11号の特集「何を読ましむべきかの研究」^[2] は、国語教科書にふさわしい教材と指導内容とは何かという議論の一例といえよう。寄稿者は垣内松三・清水実・瀬尾武次郎（現代文について）・寿美金三郎・松浦一（国語教育の使命）である。以下、主要な指摘の部分を抜粋してみる。

・「一は文学史的考察、二は文学論的考察である」「その内容は文学史的時期区分の中にあるが如くにして実は全図的に螺旋的に日本文学の全体を向上せしめて中学教育に於ける国語教育の理想を実現することとなる」
「国語教科書の教材は『文』である」「教材選択の考察に於て所謂文芸的教材に対して言語教育を重んじる教材、理智的教材又は修養的教材が対立し、その過多もしくは過小を表明する理由の根柢には、素材の区分、内容の偏見、形式の偏重の如き不徹底なる見解の横はるものであることをも反省しなければならぬ」「我が国語教育又は研究の基礎的学科としての文学概論の研究の缺如せるを遺憾とせざるを得ないのである」（垣内松三「教材選択の一考察」）

・「国語科には、1 読解力の養成 2 文学鑑賞力の養成 3 国民的精神の養成といふ三大使命の存すること」
「従来之又今日の教育の欠陥のために、我国では大政治家・大法律家・大科学者と目せられる人、其他斯道の大家を以ゆるされる人でも、源氏物語・枕草紙の何ものかも知らねば、況んや近松、西鶴の何ものかを弁へぬのである」「中等学校で日本文学のアウトラインだけでも味ははせて置かねばならぬ」（清水実「中等学校」における国語科の使命）

議論の中には「文芸的教材」である古典作品の扱い、目標としての「日本文学」の視点、等が絡んでいる。こうした「文芸教育」観への反応として同誌第9巻第8号（大13・8）には、文芸的教材の「鑑賞までの態度」に至る読解の要諦を「1 文章本位の取扱い・2 背景の描出・3 気分の把握・4 作者の想定・5 直観的なること・6 朗読・7

リズムの教授・8批判・9芸術的表現」とする「文芸的材料の取扱」（大旗祐吾「国語読本の文芸的材料について」¹³）といった論調も寄せられている。

この当時、既に中学用『大正読本』（大日本図書、大1・10）や島津久基共編『国文新読本』（至文堂、大10・10）の他、『師範学校新読本』（大日本図書、大4・11）や『女子国語読本』（大日本図書、大7・12）等の国語教科書編集に携わっていた藤村作は、『国語教育』第7巻第6号（大11・6）の「国語教育の改善」¹⁴に、「文章及び文章意識の変化」に伴う「教材の改善」を求める主張を行う。同号の金子彦次郎「三元的国語教授」、続く第7号（大11・7）の桑木巖翼「中等教育の国語科」と金子筑水「国語教授に就いて」と共に、誌面には複数の学識経験者各々の国語読本教材観や教育観が続々と開陳され、論争の様相を呈した。前述第11号の寿美金三郎「桑木、金子、藤村、金子四教授の説を読みて」¹⁵の整理によると、中等学校国語では言語学的「古文学」と「古文辞」解釈を「国語科の本體」とすべきという桑木に対して、「文芸」教材指導を擁護する他の三博士、という構図が捉えられる。桑木の「殆ど課目外の読物的の意味で、又作文の稽古の意味で」現代文を「学生が暇に雑誌か何かで読めば十分である」という意見に対し、藤村は「今日の国語読本の材料は、もつと現代的なものでなければならぬ」「その一応の理解会得を基礎として、もつと深く深り下げさせるには是非教師たる先導者を要する」¹⁶と主張し、「今の教育界は余りに現代文学に対して毛嫌ひしてゐる」「現代の国民生活に最も関係の密な現代文学や近世文学に就いては殆ど無知識の人が少くない。国語の教師としてこれでは甚だ寒心の至り」とも述べている。大正期の言説において、藤村が現代文学教材を排除するのではなく「積極的に進んで、その有害無益なものから選択された教材を与へ、教師は十分の理解を以て正しく生徒をその中から指導して、自ら選択批判の標準を得させるやうにする」必要性を主張していることには、注意しておく必要がある。実際、彼は後述の『大正読本』等で当時の近現代文学作品を積極的に教材利用している。なお、「四教授の説を読みて」の寄稿者の寿美は愛知県の旧制中学教員であり、藤村等の「現代文教材」擁護の意見を受けて文芸的教材利用を支持し、「毛嫌ひする」教師が「現代文と言へば直ちに軟文学と誤解」すること、むしろ「現代文は教師のあらが見え易い」こと等、指導現場の見地からの批判を行っている。

リベラルな傾向を強める「文芸教育」に対して、藤村作が著しく批判的な言説を強めるのは、むしろこの後のことである。関東大震災による凄絶な被災で喪われた大量の古典籍資料への哀惜、日本の文献文化復興の痛切な希求、さらにその震災直後の全集出版ブームによる文学作品の大量出版と「大量消費」及び「商品化」の危機、といった昭和初期の急激な変化の状況が、その批判の背景にあるとみられる。昭和四年の藤村作・島津久基共編の中学教科書『新選中等國文』（至文堂¹⁸）の巻一の巻頭「はしがき」には、次の文章が掲げられている。

現行中等國語読本の趨勢で、最も著しいことは、現代文の量の非常に多くなつたこと、その現代文の多数が芸術的文章であることであります。これを教育上の見地からいへば、芸術的鑑賞に由つて情操の陶冶に資せんとする教材が甚だ多くなつたことであります。それで一寸見ると文芸読本といふ相を示してをります。これは全く正しい行き方でせうか。（二行空白）

国民教育に最も大切なことは、三千年來國民の間に流れてゐる伝統精神の理解と、世界を横に貫いてゐる現代精神の理解とに在ると思ひます。この二つの精神の理解に関する中学校の学科目は、前者に修身、歴史があり、後者に修身、外国語、法制経済等があると思ひます。けれども、これ等は或狭い範圍に限られたり、又概念的な取扱を受けたりする為に、広く各方面に亘り、又具體的な事実や、説話に由つて、生徒の深い印象、強い感激を期することが難いのであります。この缺を補ふものに獨り我が國語科があります。故に國語読本はこの二點に重點を置いて文の内容を精査選擇せねばならないと思ひます。我等が國語読本の最近の趨勢を見て憂とするもの、一つは、國民性、國民精神に関する教材の減じ行くことあります。これは國語科の本分から見ても、いに戒心せねばならぬことと信じます。

本書はこの點に於ては、現趨勢と逆行するものと見られるか知らぬが、特に重きを措いて出来る限り紙数を割いてあります。即ち古文は主としてこの見地から材料を選び、現代文も、これに関する文章を多く採らうと努めてあります。けれども抽象的な説明文に由つて概念的教授を行ふことは、効果を大にするものでないと考えますから、文學的表現をなしたものを多く採る方針で編んであります。（二行空白）

國民の現代生活に於て是非持たねばならない知識は甚だ多くあります。苟も普通教育を修了したものは、社会現象についても相当の批判力を持ち、軽率な街頭の論調や、為にするもの、宣伝などに動かされないだけの知識を持たねばならないし、又国際関係の密な今日、国民外交の有力な今日、外交知識も必要であるし、家庭、思想、産業、食料等の問題についても、相当の理解を持たねばならぬと思ひます。我が国語科で悉くこれ等の専門的知識を授けることは不可能であるが、その重要なものに就いて常識として授けることは、やはり国語科の負ふべき大切な一任務であると思ひます。本書編纂に當つては、特にこの點を考慮しましたが、これを我等の理想通りに読本に実現することは、現今の教育界の実状が許しませんので、先づこれ等の點で現代生活を裨補し得べき材料を出来得るだけ採用するといふ程度に止め、改訂を重ねることに、社会の進歩に鑑みて漸次にこれを増加し行くことを期して居ります。(一行空白)

所謂文学的教材を増加した現勢については我等は異議を唱へるものではありませんが、軽浮蕪雜な現代文壇の空気に冗漫な現代文章の流風とを讀本に輸入することは、よく／＼注意すべきこと、思ひます。それで本書は文学的鑑賞を主なる目的とし、情操の陶冶に資せんとする課を多く設けてありますが、不純な内容、銑練を缺く文章は採らなかつた積りであります。(一行空白)

要するに、教育は実行でありますから、徒に理論に流れ、理想に走ることを避けて、理想を實際に調和し、實際を一步理想に近づけることを目標として編纂したものであります。

昭和三年八月

編者

藤村は大正期に現代文の指導の必要性を唱えていた。しかし昭和三、四年の時点においては、中等国語教科書の「現代文の量の非常に多くなつたこと」「その現代文の多数が芸術的な文章であること」「現代」文学流行や小作家養成的な風潮」が問題視されている。「震災後」の伝統文化や文献の断絶の危機感を背景として、所謂「軽浮蕪雜な現代文壇」の作品の教材化に対する批判が、解釈される。この「はしがき」における「理論」より「理想」を調和した「実行」という主張は、「近時各科の教授法は著しく進歩して、微に入り細に互る種々の新研究が、日々熱心

なる教育家によつて勧められてゐるが、動もすれば枝葉の小問題に分裂して、大綱を忘れ大精神を没却したるが如き議論を耳にすることもある」(『国語教育論』「三、国民教育と国語教育」)等とも共通するものであろう。以降、「日本精神」と「古典教養とその教育の必要」を訴える国語教育論、「国語主義」の主張と「古典」精神尊重という藤村の言説が各所に残され、彼の戦前の教科書編集や国語教育観のイメージを代表するものとして影響していく。

三 「西鶴」観と近世作品の「教材観」

こうした国語教材に関する議論の視点は、西鶴作品の解釈や受容を巡る問題にも窺うことができる。戦前の動向においては、「近世作品」は「文学作品」として論じる対象であるか否か、さらに「西鶴作品」は「文学芸術」か否か、あるいは「西鶴」という作家は(人格的に)いかなる(優れた)「小説家」であるか、等の問題が、「国語教材としてのふさわしさ」の議論に常に関わっているとみられる。大正期の垣内松三は「徳川期文学」について、「中等教育でこれを果するには如何にすればよいか」「又一般世間でこれを文学として判定しつつある無識を如何にして正する」(『国語教材の文学方面より見たる研究』、『信濃教育』大11・12²⁾)と唱え、その国語教材化に躊躇する態度を見せている。一方、藤村作は「芸術家としての西鶴」(大10・1)に、次のような西鶴観を示していた。

・畢竟思想家としての西鶴は平凡な境地を出でないといふ事である。世の鹹鹽を多く嘗めて来て、酸いも甘いも噛み分けた浮世の物識りであり、常識の秀でた人ではあつたらうが、眼は現実を見得るばかりで、高い理想を仰ぐに足らず、時流の中に居つた人に過ぎないといふ事である。西鶴が作の優秀なるはその思想の深遠、高尚な為ではなく、西鶴が芸術家としての本領は思想家としての方面に在るのではない。

・西鶴の心は冷かである。彼の人生を見る眼には近松の様な涙は含んでゐない。同時に近松が作中の多くの人物には近松自身の倂を見出すのであるが、西鶴の人物には殆どそれはない。

・彼の筆の人を魅する力は観察の細緻な為でなく、描写の自然な為でなく、文章の奇警皮肉な為でなく、寧ろ

所々に染み出た主観の温かみにあることが少くないのではあるまいか。

・小説話間の関係が緊密を缺いて全体の統一の不十分なるものを調べて見ると、此の小説話を繋ぐものは単に聯想であるものがある。(例、二代男「誓紙は異見の種」)此例は彼が聯想の力に依つて彼の説話の成ることを示すものであるが、同時に聯想に依つて併べ綴つた所に一章としては統一を缺き、纏まりの十分でない説話を作るに止まつて居る彼の浮世草紙の説話構成法の弱點をも示すものである。

・彼が旧来の物語の形式を套襲して、纏まつた長篇の説話を構成することをしなかつたのは、彼が物語作家として必要な想像力に乏しかつた為であらうが又一面から見れば、彼が知的であり、記憶聯想の力に秀でてゐた為めに、知らず識らず、其の長ずる所に引きずられた結果とも言はれやう。

このような大正期の近世文学研究者の論調は、例えば麻生磯次『近世生活と国文学』の「(江戸文学が)風俗姿態の外観を写すのは巧みであるが、容貌・表情・性質等の殊別を表はしてゐないのが其等の文学を通じての缺點であるやうに思はれる」(第一章 総叙)「大體に於て西鶴は女性に対する同情が尠い」(第三章 遊里中心の生活)、また片岡良一『井原西鶴』の「人間の全運命を觀じ其処に破綻と不調和との無数に存在することを知つた西鶴」「真面目な心の悲しい低迷——西鶴の道義や教訓が無力であり、重さを缺いていたのは其処であつた」等のように、概括的かつ近代的小説觀・文學觀を基とする「作家」論的な把握の傾向が強い。前掲の藤村の言説も、作品に「緊密」な「全体の統一」の小説性を求め、作家に「優れた思想家」や「人生を見る眼」「主観の温かみ」等の「人格」的要素を要求する点が、いかにも大正期らしい「文學觀」の視点であるといえよう。また、藤村は「西鶴の文章——修辭學的觀察——」⁽²⁵⁾においても、芭蕉との比較から「西鶴は「自然詠」ではない」⁽²⁶⁾「自然を対象とした記述に見るべきものがない」とし、「人間を中心とした自然、又は人間乃至人間生活を対象とした記述になると、見違へるばかりに、印象の明らかな文章を成してゐる」という「作家」としての方法を評価している。

大正二年当時に東京帝国大学助教授であつた藤村作の講演「元禄文学の特質」(藤岡作太郎三回忌記念講演會)も、おそらくそのような文學觀から近松・西鶴の作品を論じ、元禄文学を代表する近世の「作家」像を呈示したも

のとみられる。だが、松本彦次郎や三井甲之は、その講演の内容が元禄時代の「外的の類推」にすぎず、「西鶴の大尽などより結論せられた楽観論は時代全體を表現するものではない」あるいは「西鶴の如きは断片的記述に執着せる物質主義の享樂趣味者」であり「山鹿素行などをも顧みるべき」(『人生と表現』大2・3)といった批判を寄せた。

前掲の垣内松三の「基礎的学科としての文学概論の研究の缺如」という指摘に留まらず、当時のこうした文学研究者や作家たちの「近代小説論的」西鶴文学の批評は、かなり概括的な観方の例といえる。「写実主義」とされた西鶴の「自然」と「人間生活」それぞれの「写実」の「矛盾」を、その写実の「対象」(ひいては作者の興味関心)の違い、と解釈している点が、特徴的である。芭蕉や蕪村のような「自然」の捉え方と西鶴の着眼点とは何かが違う、とは捉えられているものの、「それを解釈し説くパラダイム」が日本近世文学研究史上に現れてくる趨勢は、むしろ昭和三十年代以降(所謂「暉峻西鶴」以降)と考えられる。平成の今日の研究においては、例えば染谷智幸が人為的な「箱庭的世界」とすら指摘するように、西鶴の方法は「客観的写実」や「現実の再現」ではなく、(賦物等で培われた俳諧的感觉による)「比喩イメージ(幻像)のリアルさ」の方法として捉えられる。戦前の研究者は西鶴の「リアルさ」の要素を「写実」の用語で説明しようとして、起こる矛盾の辻褄をそれでも「写実」の語を手放さずに合わせようとしている感がある。

「談林俳諧的である」とされる西鶴作品の「文体」も、「小説論」側からの批判意識の強い戦前の研究者には、あまり肯定的に捉えられていない。暉峻康隆の次の指摘が代表的なものである。

してみると矢張り西鶴の作品だけが特に難解であるといふ理由は、一文一節のレトリックより全体的構成に及ぶこの「俳諧的手法」の故ではないであらうか。それは全く談林俳諧の理解の困難さに通ずるものである。事実又このやうな方法によつて表現された作品を、全的に理解し享受し得る読者といふのは、貞門・談林的な詩的常識を持つ読者に限るのである。従つて一度天下が智的技巧に背叛する蕉風俳諧の洗礼を受けた後は、かかる表現の方法は消滅すべきであつた。しかしながら西鶴は流石に優れた芸術家であつた。散文芸術における表

現の方法としては邪道ともいふ可きこの「俳諧的手法」を次第に克服し、元禄以後の武家物・町人物等の作品においては、平明達意なる散文の本質へ近づいてゐるからである。(「聯想の文学——俳諧的手法について——」)⁽²⁸⁾
「近代小説」的小説観の側から見た(克服すべき)西鶴文体批判、また「俳諧的手法」のみならず、「(西鶴俳諧研究)(改造社、昭3)にも窺われる)「俳諧連句」そのものへの幾分否定的な評価等が、昭和初期の各論者にみられる。戦後の広末保「前近代の可能性」や中村幸彦の近世文学観、谷脇理史以降の「(暉峻西鶴)批判」等の研究の動向は、このように先行する「近代的」西鶴観を、「脱近代」的な視点で覆す方向に展開している。

戦前の当時において、藤村作は西鶴と芭蕉を含めた「俳文」のジャンルの「非文法的な表現」の特徴について、「その一つは連想的である点に在る。俳文の表現の興味は、論理の運びの面白さでもなく、結論の卓抜の面白さでもなく、実はその想が、その觀念が、連想的に次から次へと連続するその個々の想の奇抜又豊富及びその連想の意外などの面白さに在る」(「文体上の『俳諧的』」)とし、「文体の非論理的なること」の原因に「印象的な排列」「聯想的、印象的な想の排列法」を指摘する。その特質に「面白さをおぼえる」ものでありつつ「非文法的」「非論理的」という表現を用いる藤村の言説は、自ら近代小説理論で学んだ「近代」の研究者として、近世文学の好事家趣味の域を学術的に超克しながら近世文学の特質を認めようとする彼の位置を窺わせる。その際、例えば岡崎義恵の文芸学的美意識による「芭蕉を西鶴より高からしめる」感とは異なり、藤村は近世文学そのものを評価する観点から、西鶴と芭蕉の特質の本質的違いを(近代文学理論用語的でありながらも)方法論的に分析しようとする。彼は「和歌及び古典文」を「雅言」、「近古の軍記物語」を「所謂和漢混淆」、「俳文」を「雅俗折衷体(俗語の混淆)」とした上で、

この点では芭蕉の俳文は寧ろ異数であると見たい。さうして用語における雅俗の混淆は元禄期に於ける俳文の一特徴であるに止らず、これと時を同じうする西鶴の浮世草子の文体の上でも、又近松の浄瑠璃の文体の上でも同様である。つまりそこにこの新しい一期の文体の特徴として、各種文学の上に略一致したものが見られるのである。(「文体上の『俳諧的』」)

とする。一連の藤村の言説には、近世文学作品を「文学」の研究対象とすること、国語教育においては指導教材とすること、そのそれぞれに対する「近代」的観点側からの反論や批判の強さを予期しつつも、「現代文学」と対照される前近代の文学¹¹「古典」として作品を扱おうとする姿勢が受け取れる。

その一方で、藤村作や片岡良一等から暉峻康隆に至る西鶴論の流れには、近代人から見た「作家——人格」論的な視点が幾分か共有されており、西鶴作品の当時の教材化の「教材観」には、その影響の大きさがかなり認められる。〈「自然詠」に優れない、「人間乃至人間生活」に優れた〉作品、というテーマや捉え方が、既に戦前から「借家大将」や「大晦日」が国語教材化されていた基にあると考えられるのである。そのような教材観を背景に、実際に藤村が関わった当時の教科書の例とその特徴を見ることとしたい。

四 藤村作の中学国語教科書にみる古典教材と西鶴作品

【1】『大正読本』『女子大日本読本』等に見る作品教材

復古的な「日本精神」を主張した人物、という藤村の中等国語教科書史上のイメージ⁽¹²⁾を強く印象づけるものは、むしろ藤村作自身の著した文章から採録された「現代文」的な国語教材の方であるかもしれない。例えば八波則吉編『現代女子国語読本』(大13⁽¹³⁾)「二二 国語と国民的自覚」(巻七)や「十三 国文学研究の新意義」(巻八)等に、彼の主張の「教材」化がされている。このような藤村の「現代文」教材例は多い。

・国文学は民族的自覚に最も役立つものと考へられる。なぜならば、国文学は国民自身の画がいた自画像であり自叙伝であつて、そこに偽らない内面が告白されてゐるからである。

・日本及び日本精神を知るためには、古典文学が最も多く役立つであらう。我々が万葉集を中心として上代の歌謡を読み、源氏物語を中心として中古の文芸を見、平家物語を中心として中世の叙事詩を読み、近松を中心として近世の戯曲を味はつたならば、その中から自然に日本的なる精神の形態と本質とにふれ、そこから

受ける感化は決して尠少ではないと信ずる。そこに、きはめて自然にして、しかも確實堅固なる国民的自覚は得られ、日本及び日本のなるものへの強き愛が生れるものと確信するのである。

(二二) 国語と国民的自覚」※「国語教育論」を基にしたもの)

一方、藤村編集の教科書における(現代文でない)すなわち「古典」「古文」相当の作品教材の構成と配置の例をみる。旧制中等学校用国語教科書はほぼ全十卷十冊の形態で、通常は五年間の各学年に二卷二冊ずつの進行とし、殊に高学年では古典から現代に至る文学史指導を意識した教材が配分されていることが多い。大正元年初版の藤村作編『大正読本』⁽³⁴⁾の卷九・十(中学五年用)の場合を例にとると、「古典」の「古文」に該当する(江戸時代以前の)作品(※以下、傍線を付す)が、明治以降の文語文とも混在する形で配置されている。

- 卷九 1 祖宗の宏謨(徳富蘇峰) 2 南露春宵(上田敏) 3 待賢門の戦 一(平治物語) 4 待賢門の戦 二(平治物語) 5 撈蝦兒の曲(幸田露伴) 6 公同生存(穂積八束) 7 楽翁隨筆(白河樂翁) 8 幻住庵記 9 蕉風 10 ひとりごと(上島鬼貫) 11 島帝国の中原 一(三宅雪嶺) 12 島帝国の中原 二(三宅雪嶺) 13 小話二則(徒然草) 14 平安京 一(藤岡作太郎) 15 平安京 二(藤岡作太郎) 16 夏季の学生(高山林次郎) 17 望郷の歌(薄田泣菫) 18 友人に与ふる書(網島梁川) 19 影富士(小島烏水) 20 竹取物語(坪内逍遙) 21 岡部日記より(賀茂真淵) 22 五重塔(幸田露伴)
- 卷十 1 日本国民の使命 一(大西祝) 2 日本国民の使命 二(大西祝) 3 先帝奉悼の演説(曾我祐準) 4 先勞後楽(貝原益軒) 5 白峰陵(幸田露伴) 6 山家集の後に書す(佐々木信綱) 7 鎌倉(東関紀行) 8 泰時論(神皇正統記) 9 秋姿の冥想(網島梁川) 10 明治の和歌 11 少将都還(平家物語) 12 八島 一(平家物語) 13 八島 二(平家物語) 14 徒然草より 15 谷口蕪村と高井几董(正岡子規) 16 蕪村の俳句と几董の俳句 17 新俳句(子規、為山) 18 百蟲譜(横井也有) 19 木曾義仲 一(源平盛衰記) 20 木曾義仲 二(源平盛衰記) 21 大丈夫の覚悟 一(幸田露伴) 22 大丈夫の覚悟 二(幸田露伴) 23 わがゆく海(薄田泣菫) 24 東京風(陸羯南) 25 学問死活弁 一(高山林次郎) 26 学問死活弁 二(高山

林次郎)

教材の中には(元の物語本文ではない)坪内逍遙の現代戯曲「竹取物語」の一部(挿絵付き)や、古典作品に関連した正岡子規「谷口蕪村と高井几童」評論等も収録されている。例えば15、17においては、「俳諧」から「新俳句」に至る教材が「古典」から「近代」「現代」への一連の流れの連続性のあるテーマのもとに配列されている。古典作品に対し「近代以降の文章」のテーマがその理解を補う点では、所謂「現国古文融合」の構成ともいえ、「日本及び日本精神を知るためには、古典文学が最も多く役立つ」という主張が、教科書教材の配列にも反映されているとみられる。当時の国語教科書では、今日の古典教材とも共通する『平家物語』『徒然草』や蕪村句などの「普遍的」作品もある一方、近世の松平定信、貝原益軒、近代以降の高山林次郎、大西祝に至る「修養的」論説の群もあり、今日の定番化した「古文」教材の種類以上に、様々な教材選択が窺える。また、逍遙や泣菫など、文語体を含む明治の「美文」は、現代文の国語教材ながら一つの「文範」⁽³⁵⁾でもあったとみられる。

【2】藤村作編『帝国新国文』の近世作品教材と「安立町の隠れ家」

昭和七年の藤村作編『帝国新国文』⁽³⁶⁾十巻十冊は、前掲の『大正読本』や『新選中等国文』以上に、藤村自身執筆の教材が多く、全体的に「国民性、国民精神に関する教材」の採用に一層配慮した構成となっている点特徴的である。ここで巻一〜巻十の教材作品の傾向と、「古典」教材【1】と同様、傍線を付す)の配置を眺めてみる。

- 巻一 1 或棟梁の話(藤村作) 2 黎明来れり(北原白秋) 3 花の都(芳賀矢一) 4 狎の彫刻(高村光雲) 5 無線電信の発明 6 智慧は小出しに(福沢諭吉) 7 絵の旅(矢崎千代二) 8 独逸の少年(池田宣政) 9 海舟の苦学(山路愛山) 10 舟旅(島崎藤村) 11 空の旅(久米正雄) 12 母の味(五十嵐力) 13 夏の夜の星(山本一清) 14 朝顔の種(三浦修吾) 15 森の英雄(薄田泣菫) 16 夏の興趣(相馬御風) 17 終生の葉(床次竹二郎) 18 朝が来た(千家元磨) 19 鳥と猫(夏目漱石) 20 鼠(芥川龍之介) 21 会得(沼波瓊音) 22 大海の日の出(徳富健次郎) 23 乃木将軍(桜井忠温) 24 英雄の反面(藤村作) 25 皇室に

卷二 対する情熱（永田秀次郎） 26母をたづねて 一（楠山正雄・訳） 27母をたづねて 二（同）
1 日本民族の発展（田中義一） 2 秋の朝（尾崎喜八） 3 読書と交際（巖谷小波） 4 日本人と模倣（中山忠直） 5 美しい我が国（増田義一） 6 三種の人間（福沢諭吉） 7 雲龍の図（薄田泣菫） 8 工芸品

（山本鼎） 9 随筆三章（五十嵐力） 10 愛国の歌（藤村作） 11 日本武士の精神（大町桂月） 12 邪心（南条文雄） 13 病床より（高山樗牛） 14 童心（相馬御風） 15 青年よ大志あれ（永田秀次郎） 16 鳩のぬぐら（中勘助） 17 平素の修養（佐藤紅緑） 18 北海道の旅（九条武子） 19 梅の花（千家元麿） 20 父の思い出（斎藤茂吉） 21 日本の幸福（大森金五郎） 22 母（鶴見祐輔） 23 父母に別れて（二葉亭四迷） 24 忠敬の晩学（幸田露伴） 25 出征（内田軍曹手記）

卷三

1 日本の風光（伊藤忠太） 2 仕事を楽しめ（増田義一） 3 川二題（千家元麿、佐々木信綱） 4 金言三則（若槻礼次郎、鳩山一郎、武藤山治） 5 釣銭（米山梅吉） 6 祖国を思ふ心（佐々木指月） 7 爆弾三烈士（小笠原長生） 8 蟲出づる頃（横山桐郎） 9 大根売の話（柴田鳩翁） 10 時計（薄田泣菫） 11 開墾小屋（白鳥省吾） 12 不断の努力（八波則吉） 13 鬼作左（新井白石） 14 雨の趣味（黒田鵬心） 15 国立公園（青木芳雄） 16 真夏（北原白秋） 17 旅順戦蹟秘話（上田恭輔） 18 少年伝令使（桜井忠直） 19 まむしと百足の闘ひ（堀内又三郎） 20 藤樹先生（橋南谿） 21 城明け渡しの日（大仏次郎） 22 諫言（湯浅常山） 22 科学と空想（泉俊夫） 23 秋風の音（若山牧水） 25 ますほの小貝（岩田九郎）

卷四

1 武蔵野の秋（国木田独步） 2 四季（佐藤春夫） 3 史伝を読め（大町桂月） 4 曾呂利の頓智（湯浅常山） 5 エトランゼエ（島崎藤村） 6 小さな旅人（薄田泣菫） 7 路傍の草（相馬御風） 8 老僧の接木（室鳩巢） 9 別れの握手（その一）（真山青果） 10 別れの握手（その二）（同） 11 桃山御陵（田山花袋） 12 幼き日（柳沢健） 13 慈母の追憶（仲小路廉） 14 運動の精神（増田義一） 15 松と我が国の風景（市島春城） 16 生物進化の話（戸沢富寿） 17 新月（北原白秋） 18 両頭の蛇（松平定信） 19 怖かつた話（福沢諭吉） 20 篤実（橋南谿） 21 人物の大小（山路愛山） 22 潜水艦の沈没（福田一郎） 23 日本新八景（河

卷五

東碧梧桐・泉鏡花・幸田露伴・吉田絃二郎・北原白秋・田山花袋・高浜虚子・菊池幽芳

- 1 熟慮断行 (藤村作) 2 桜花 (笹川臨風) 3 吉野山 (藤岡東圃) 4 自動車王フォード (清澤洌) 5
 ふるさとの山 (石川啄木) 6 土 (長塚節) 7 菖蒲ふく頃 (島崎藤村) 8 山上の湖へ (若山牧水) 9
 仁和寺の法師 (吉田兼好) 10 崎人一茶 (本山获舟) 11 一茶の俳句 (相馬御風) 12 若葉 (正岡子規) 13
 四季の詠め (貝原益軒) 14 鮭 (豊島與志雄) 15 地下鉄道に乗る (改造) 16 川柳選 17 アルプスの夏
 (榎有恆) 18 ツェッペリン来る (東京朝日新聞) 19 瓜盗人 (続狂言記) 20 山のたより (五十嵐力) 21
 山雀 (薄田泣菫) 22 落葉松 (北原白秋) 23 世に処する道 (勝海舟) 24 忠僕 (小笠原長生) 25 故郷の
 花 (平家物語) 26 安寿と厨子王 (森鷗外)

卷六

- 1 田家の朝 (相馬御風) 2 朝 (川路柳紅) 3 自然の愛 (藤岡東圃) 4 空ゆく雁 (曾我物語) 5 南極
 の上を飛ぶ (世界探検全集) 6 青年の覚悟 (渋沢栄一) 7 大和の秋 (佐々木信綱) 8 秋深し (横瀬夜
 雨) 9 俚諺 (大西祝) 10 名器を毀つ (薄田泣菫) 11 松の下露 (太平記) 12 夜叉王 (岡本綺堂) 13 夕
 霧の野 (中西悟堂) 14 わが生ひ立 (渡邊畢山) 15 蜜柑 (芥川龍之介) 16 故国に帰りて (島崎藤村) 17
 野に出てよ (島崎藤村) 18 真理 (高山樗牛) 19 内蔵助と主税 (大仏次郎) 20 義士討入を報ず (榎本其
 角) 21 木曾殿の最期 (平家物語) 22 平原を行く (鶴見祐輔) 23 近世の歌 (真淵・千蔭・宣長・景樹・
 曙覧・蓮月・望東尼) 24 日本の民謡 (島木赤彦) 25 勝敗 (三宅雪嶺)

卷七

- 1 昭和日本の目標 (藤村作) 2 草枕 (夏目漱石) 3 梅が香 (芭蕉・蕪村・一茶) 4 独創の国 (日本)
 (平福百穂) 5 中宮寺の観音 (和辻哲郎) 6 晩春の別離 (島崎藤村) 7 花のさだめ (本居宣長) 8 朝
 飯 (島崎藤村) 9 築山先生に上る書 (頼山陽) 10 西郷と大久保 (山本雄三) 11 西郷南洲 (藤村作) 12
 松島と象潟 (松尾芭蕉) 13 詩人芭蕉 (藤岡東圃) 14 芳流閣 (滝沢馬琴) 15 馬琴の心境 (芥川龍之介)
 16 夏の夜 (深養父・敏行・千里・読人しらず・伊勢・素性・遍照・友則・是則・宗子・列樹) 17 広重
 と東海道風景 (小島烏水) 18 小松内府 (平家物語) 19 塔影 (河井醉茗) 20 ベートーヴェンの生涯 (中

沢臨川) 21 小草の花(綱島梁川) 22 百蟲譜(横井也有) 23 雪花の美観(芳賀矢一) 24 高瀬船(森鷗外)

卷八

1 日本精神と世界精神(藤村作) 2 隅田川の雨(加藤千蔭) 3 心の置きどころ(山本有三) 4 天の香山(後鳥羽院・家隆・実定・俊成・良経・頼政・式子内親王・定家・雅経・家隆・清輔・慈円) 5 閑居雜記(北村透谷) 6 曼珠沙華(近松秋江) 7 日野山の奥(鴨長明) 8 歎を持つ英雄(後藤文夫講演) 9 名月(芭蕉・其角・風雪・文章・去来・惟然・凡兆・越人) 10 長柄堤の曙(坪内逍遙) 11 恩賜の御衣(大鏡) 12 塩原(尾崎紅葉) 13 平泉と立石寺(松尾芭蕉) 14 芭蕉の臨終(沼波露音) 15 鉢木(観世流謡曲) 16 尾形了齋覚え書(芥川龍之介) 17 青空の鐘(三木露風) 18 那須与一宗高(平家物語) 19 夢応の鯉魚(上田秋成) 20 新島守(増鏡) 21 蜂(佐佐木茂索) 22 銀の猫(上田秋成) 23 歌人西行(藤岡東圃) 24 故郷の母上へ(八波則吉)

卷九

1 奈良の情趣(笹川臨風) 2 希望(中村孝也) 3 懸泉堂の春(佐藤春夫) 4 落花の雪(太平記) 5 日本国民の特色(藤岡東圃) 6 幻住庵の記(松尾芭蕉) 7 芭蕉の生活(藤村作) 8 松の手入(里見弴) 9 わがうた(北原白秋) 10 坐り(山本有三) 11 寂光院(平家物語) 12 平家雑感(高山樗牛) 13 海辺(中島広足) 14 浄瑠璃寺(和辻哲郎) 15 わが家の庭(中勘助) 16 白薔薇(子規・鬼城・虚子・漱石・井泉水・碧梧桐・一碧楼・小波) 17 子規における書(夏目漱石) 18 橘曙覧の歌(正岡子規) 19 獅子ヶ城(近松門左衛門) 20 菓林子の芸術(藤村作) 21 出廬(土井晚翠) 22 隅田川(謡曲集) 23 永徳と山楽(中井宗太郎)

卷十

1 海外発展の要諦(後藤新平) 2 秩父むら山(夕暮・空穂・赤彦・白秋・薫園・庄亮・柴舟・牧水・信綱) 3 万葉集の旅の歌(佐々木信綱) 4 おのが物まなび(本居宣長) 5 沼地(芥川龍之介) 6 望の夜(竹取物語) 7 万里の長城(土井晚翠) 8 菊花の約(上田秋成) 9 風雅論(徳富猪一郎) 10 貧性独夜(与謝蕪村) 11 剣難(中村吉蔵) 12 寺子屋(竹田出雲) 13 我が国の絵画(藤岡東圃) 14 狩野芳

- 崖（岡倉覚三） 15安立町の隠れ家（井原西鶴） 16道長の膽力（大鏡） 17小野の雪（伊勢物語） 18世間を恐るな（夏目漱石） 19家の意識（和辻哲郎） 20庭園と国民性（本多静六） 21舟路（土佐日記） 22国文学の現代的意義（藤村作） 23愛と人生（網島梁川） 24生命の共鳴（厨川白村）

低学年では現代文を主に、高学年では文学史・古典教材へと、発展的指導を見通した教材の配置とみられるが、現代文としても訓話的な巻一「或棟梁の話」に始まる各教材に、「文学」主義よりも）言語教育、「国語」教育重視の姿勢が窺える。その一方で、謡曲や軍記等の中世作品も比較的多い。近世作品には随筆や思想や脚本なども含まれ、頼山陽や与謝蕪村の書簡文（候文）も採られている。この教科書でも「古典教材」と関連する「解說的論説」の現代文を組み合わせた教材構成が目目される。中世・近世作品教材と近代教材との連続性によって、「古典」が「現代と過去に互って追究せらるべきもの」（『国語教育論』）という考え方を体現した教科書、といえるだろう。

いわゆる「元禄文学」では芭蕉、近松を取り上げる中、西鶴作品では卷十（最終冊）に『西鶴文反古』『安立町の隠れ家』が採用されているのが興味深い。作品本文の掲載にあたっては句読点を補い、「」は用いない。話末は（前略）兄弟一所に心をあはせ、雲をわけ地を割き乾坤の中はさがし出し、父の孝養にと存じ候に伝九郎にはなれ、さてくは是非もなき仕合に候。是によつて四月晦日に住吉の借宅を仕舞ひ南都へ立ち越し申候。東大寺の末寺にしるべ御座候。又是にしるのび、戸平在家をたづね申すべく候。貴様御事五月下旬に江戸へ御くだり、その時分住吉迄御立寄くださるべきよし、此度は御目にかかり申すまじく候。その御断りのため舟宿中国屋勘六方にこの一通書き残し置き申候。

卯月二十七日

徳明寺久兵衛様

風越伝五郎

——萬の文反古——

となっており、『万の文反古』卷二の二話末の「評語」の「此の文の子細を考見るに西国にて父をうたれ其敵とねらふと見えたりいづれ武士の身程定めがたきはなし此心さしにては天理をもつてうづべき事也」の部分は、教科書本文に掲載されない。学習指導方法を想定するに、その内容把握のヒントとなりうる「評語」部分を手掛かりとせず、

「書簡文」の部分から登場する人物の置かれた状況や心情を解釈することに指導目標を置いた教材とみられる。発展学習としては、実際に解釈した「書簡文」本文の内容と、作品原文の「評語」部分とを比べて、両者の〈見解〉が一致するものなのか、あるいは二つが組み合わされた行間に別の意味が発生するものか、等を問いかけることもできる。書簡文の部分は「忠義の肴売」（目録副題）に身を窺して敵討に苦勞する、兄弟の少年を主人公とした「武者物」的な堅実な内容と捉えられる。国文学研究や国語教育にまで「時局性」が強く求められていた³⁷昭和十年代において、人物の「心情」を主題として読み取るのに適切な教材として採用された可能性が考えられる。

藤村作は『帝国新国文』編集の後、昭和九年以降は『国語教育学会』を設立、会長として国語科教員の講座や講習、共同研究会等の開催等、「国語学・国文学・国語教育界の学閥・学派を超越した」加盟者による国語教育の協同と実践の基盤作りにその行政的手腕を発揮し、精力的に活躍した人物である³⁸。同時に、研究者としては帝国大学の「日本近世文学研究」を進め、また、「常山紀談」等の「訓話」修身的教材に留まらず、近松・西鶴等の「近世文学」を教材化した教科書監修をも進めた。大正末〜昭和初期の「現代小説」の「軽浮蕪雑な現代文壇の空気と冗々な現代文章の流風」が問題視され批判されるのに比べ、「現代における」近松・西鶴の作品は、近世的な難解な表現ながらも〈「文学」としての「古典」〉に位置する。こうした捉え方に、大正期当初の垣内松三の「近世文学の教材化批判」から変化していく時代の中に置かれた藤村の状況が窺える。

儒教は決して日本精神そのものであるとは言へないのである。しかるに、わが国民文学は、万葉集にせよ、源氏物語にせよ、平家物語にせよ、近松・芭蕉・西鶴の諸作にせよ、いづれも日本人としての純粹な思想感情をもつて生れ出たものである。（中略）儒教万能時代から引きつづいてゐる国典卑下の風潮は国語教育に従事する人々の共同の努力によって、一刻も早く改むべきものであると考へる。さて日本精神は上述のごとく、現代と過去に互って追究せらるべきものである。（『国語教育論』二、日本の精神と国民教育）

上代〜近世までを「古典」として、近松・芭蕉・西鶴も「日本の伝統的文学」であり、その中の「教材にふさわ

しい」作品を教科書に採用するべきであるとする、「近代的」な「古典観」というべきであろうか。
戦前の岩波『国語』と戦後の筑摩『国語』における同一教材の本文構成を比較した余郷裕次の指摘によると、特に「現代文」に相当する論説や評論の文章の教材の構成にみる削除部分などにおいて、戦前から戦後への改訂が著しいという。それと比較して、戦前から「古典」教材であった「大晦日」や「借家大将」、芭蕉『奥の細道』は、戦後も教科書に残った教材であるといえる。

戦後の教科書編集において、柳田国男編『高等学校 国語 総合編』（東京書籍、昭30）と『新編国語総合編』（同、昭33）が『東遊雑記』『おあん物語』等の近世作品を重視し多く採用しているものの、それは独特な例である。もとより近世小説、西鶴浮世草子は古典教材の主流ではなく、曲流文や破格の近世語を含有する難しさをもつ「応用編」であることは、戦前の中学国語教科書でも高学年での配当であった点から窺える。戦後の談林俳諧的手法の分析的観点による西鶴作品評価は、戦前にはまだ進んでおらず、専ら「人間乃至人間生活」の機微を読み取る「小説」の「読み方」によって選択された有名な章話が、普遍的なテーマで解釈される古典教材となっていた。西鶴作品が「古典」となったこと、教材に採用されたこと自体、大正〜昭和の「文芸教育」の経緯を通過してきた事情が絡んでいたとみられるが、藤村作が「日本精神」を称揚した古典作品教材の中においても、時局的批判の中においても、有名な章段の作品教材は微妙な均衡を保ち続け、古典教材としての生命を戦前から今日まで維持し続けている、と言える。しかしそれによって同時に、戦前から引き継がれた「近代小説的読み」もまた、戦後の西鶴作品研究の変化とは別に、ある種普遍的に今日まで共有され続けているという問題を孕むことになったのではないか。具体的な教材例について、今後も引き続き考察することとする。

注

なお、引用箇所については、引用者が便宜上現行の字体に改めた。

- (1) 有働裕『源氏物語』と戦争——戦時下の教育と古典文学——(インパクト出版会、平14・12)
- (2) 有働裕「教材としての西鶴作品——変遷とその意味——」(『愛知教育大学教科教育センター研究報告』第15号、平3・3)、堀切実「西鶴と古典教育——『本朝二十不孝』教材化案——」(『西鶴と浮世草子』第1号、笠間書院、平18・6)等。
- (3) 藤井紫影「西鶴の好色本と遊女評判記」(昭6)、竹野静雄監修『西鶴研究資料集成』昭和6年・7年(クレス出版、平22・10)所収。
- (4) (3)『西鶴研究資料集成』所収。
- (5) 『西鶴の大衆化——その註釈と翻刻について——』(『大阪朝日新聞』昭6・5・26)、(3)所収
- (6) 水谷不倒「井原西鶴」(『早稲田文学』76、77号、明27・11)12、鄭洲生(島村抱月)「人に答ふる書」(『早稲田文学』74、明27・10・25)『西鶴研究資料集成』、及び竹野静雄解説参照。
- (7) (6)『西鶴研究資料集成』所収。
- (8) (2)に同じ。
- (9) 拙稿「藤村作の国語教育論と西鶴訳注の背景——出版状況と「古典普及」活動——」(福岡女子大学文学部『文藝と思想』75、平23・3)
- (10) 『八大教育主義』(玉川大学出版部、昭52・7復刊版)
- (11) 中谷いずみ「一九一〇年代における「人格」と「教育」——片上伸『文芸教育論』前史——」(『国語科教育』第70集、平23・9)
- (12) 『国語教育』第二卷 第七卷九号(大正11年9月) 第七卷一二号(大正11年12月)(大空社、復刻版 平7・4)
- (13) 『国語教育』第二六卷 第九卷五号(大正13年5月) 第九卷八号(大正13年8月)(同前)
- (14) 野地潤家編『国語教育史資料』(東京法令出版、昭56・4)「第一卷 理論・思潮・実践史」第六卷 年表参照。
- (15) 『国語教育』第二十卷 第七卷六号(大正11年6月) 第七卷八号(大正11年8月)(同前)
- (16) (12)に同じ。
- (17) 桑木論文、藤村論文の本文は共にそれぞれ『国語教育』復刻版の誌面からの引用に拠る。
- (18) (9)に同じ。
- (19) 藤村作・島津久基共編『新選中等國文』(至文堂、昭4・1)巻一
- (20) 藤村作『国語教育論』(岩波講座日本文学 第九回 岩波書店 昭7・1)
- (21) 有働裕「中学国文教科書」における西鶴作品について」(『愛知教育大学教科教育センター研究報告』14号、平2・3)

- (22) 「芸術家としての西鶴」、『大阪朝日新聞』大正10年1月15日、19日記事。後に『上方文学と江戸文学』（至文堂、大11・11）に所収。
- (23) 麻生磯次「近世生活と国文学」（至文堂、大14・10）
- (24) 片岡良一「井原西鶴」（至文堂、大15・3）、第五章「芸術家としての強み弱み」第二節「芸術観及び小説構成能力」
- (25) 『国語と国文学』第7巻第4号（至文堂、昭5・4）
- (26) 松本彦次郎「藤村助教の講演に就いて」、三井甲之「西鶴に就いて」、共に『西鶴研究資料集成 大正2年～8年』（クレス出版、平5・12）所収。
- (27) 染谷智幸「西鶴小説論——対照的構造と〈東アジア〉への視界——」（翰林書房、平17・3）、第二部第四章「〈性〉の回遊式庭園——「好色」かつ「二代男」たることの至難をめぐって」
- (28) 暉峻康隆「聯想の文学——俳諧的手法について——」（『俳句生活』第5巻5号、昭13・5）
- (29) 藤村作「文体上の「俳諧的」」（『俳句研究』第5巻2号、昭13・2）、『西鶴研究資料集成』所収。
- (30) 岡崎義恵「芸術としての俳諧」（要書房、昭25・2）他。なお、藤村の言説では「愛の人近松」（『上方文学と江戸文学』、(22)のように、近松の人格的要素を称揚している傾向が感じられる。
- (31) 眞有澄香『読本』の研究——近代日本の女子教育——（おうふう、平17・6）
- (32) 八波則吉編『現代女子国語読本』（東京開成館、大13・10初版、昭12・8修正七版）、本文引用も拠る。
- (33) 諸井耕二「旧制中学校教科書 岩波編集部編『国語』全十巻をめぐって」（『宇部工業高等学校研究報告』第36号、平2・3）
- (34) 藤村作編『大正読本』（大日本図書、大1・10初版、大2・1訂正再版）
- (35) 橋本暢夫「中等学校国語科教材史研究」（溪水社、平14・7）「第1編 現代文教材の進出による教科内容の創成」より、第一章「坪内逍遙作品の教材化の状況とその史的役割」、第二章「徳富蘆花作品の教材化の状況とその史的役割」等。
- (36) 藤村作編『帝国新国文』（帝国書院、昭7・11、昭8・8訂正発行）
- (37) (2)に同じ。
- (38) 野地潤家『国語教育学史研究』（溪水社、平23・2）、第三章「国語教育学会」の役割・業績」
- (39) 余郷裕次「同一教材に拠る戦前戦後の比較——岩波『国語』と筑摩版『国語』との同一教材を中心に——」（『国語教育研究』第30号、昭61・8）
- (40) 杉本仁「柳田国男と学校教育——教科書をめぐる諸問題——」（臬社、平23・1）第三章「国語教科書」四「高等学校国語教科書」より「固定教材の排除と近世作品重視」